

都道府県番 号 15	学校名 新潟市立明鏡高等学校	課程 定時制	学科 普通科	指定期間 26～28
---------------	-------------------	-----------	-----------	---------------

平成26年度 個々の能力・才能を伸ばす特別支援教育 研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

高等学校に在籍する障害のある生徒の自立と社会参加を図るため、特別支援学校などの専門機関と連携し、自立活動を取り入れた特別の教育課程の編成及び得意分野を伸ばす教科指導の充実に関する研究開発を行う。

2 研究の概要

自閉症などを対人関係に困難を示す生徒を対象に、自立活動の「人間関係の形成」に関する指導を中心に週2コマ（年間70単位時間）を設定する。個別の指導計画の作成に当たっては、特別支援学校や特別支援教育センターなどと連携し、支援方法や評価の方法について研究する。

また、現行の教科指導の中で、得意分野を活かしたり情報の伝達方法を工夫したりするなどして生徒の実態や特性に応じた指導を追求する。

3 研究の目的と仮説等

（1）研究開始時の状況と研究の目的

本校は単位制の定時制高校ということもあり、多様な生徒が学んでいる。近年、不登校や発達障害・情緒障害・精神疾患等の生徒が学校生活上の困難を抱えながらも普通高校で学習したいという意欲を持って入学してくるケースが大変多くなっている。こういった状況に対応できる体制を作り、きめ細やかな支援を行うために、校内特別支援教育委員会が中心となり今年度から個別の指導計画の作成に取り組み始めた。

また、年度当初から本事業の通級指導対象生徒の選定が大きな課題であったため、決定するまで時間がかかった。そのため、事業への取組が後期から本格的に始められることとなったが、校内研究推進委員会に属する校内特別支援教育委員会の教職員で、以下の観点から対象生徒の候補をあげて担任、生徒・保護者に説明し、意欲のある生徒を決定した。

ア 第1回運営指導委員会における助言指導に基づいて検討した。

イ 本校職員の気づき、中学校からの情報、入学時の情報、保護者からの情報を基に校内特別支援教育委員会が決定した個別の指導計画作成対象生徒のリストを参考にした。

ウ 入学前の通級指導経験や特別支援学級在籍経験の有無を考慮した。

エ 入学後、学校生活上の困難を抱えていると思われる生徒・保護者への聞き取りを行い自立活動の授業への参加希望を聞いた。

オ スクールカウンセラー、にいがた若者自立応援ネットとの相談を行っている生徒を考慮した。

（2）研究仮説

本研究では、高等学校に在籍する発達障害など様々な要因により特別な支援が必要な生徒に対し、障害の状態に応じて必要な支援を受けることができるシステムとして、自立活動を取り入れた特別な教育

課程を編成し、通級指導教室を設置し指導を行っていく。

発達障害の可能性のある生徒の特性を把握し、その特性に応じて各教科の一斉指導での支援方法を工夫することにより、生徒の個性や可能性を伸ばしていく。

(3) 教育課程の特例

教育課程の特例の内容	指導内容	授業時間数・単位数等
自立活動の時間を設定 卒業の要件に含む	人間関係の形成を主とする 通級指導教室における指導 ・個別指導 ・グループ指導	週2単位時間を午後に設定 35時間を予定 (後期開始のため)

(4) 個々の能力・才能を伸ばす指導（現行指導要領における一斉指導の改善工夫等）

- ア 今年度の取り組みは、まず運営指導員からの教員向けの指導・講話をいただき、先進的な取り組みの事例から本校での授業改善の示唆を得た。
- イ これをもとに各教科で、学びのユニバーサルデザインを取り入れた公開授業を実施して、一斉授業の改善工夫についてそれぞれ協議を行う。
- ウ 指導方法および授業形態は、各教科の特性に合わせたそれぞれのやり方で実施する。
- エ 現在までは、教材・教具に、実物や見本などの具体物を用いる、ICT機器を活用する、蛍光色のチョークを使用するなどのさまざまな工夫を凝らす。

(5) 研究成果の評価方法

- ア 評価対象は、SSTルームで指導を受ける生徒及び発達障害等を含め障害のある特別な教育上の支援が必要な生徒とする。
- イ 評価方法は、「A個別の指導計画に基づく評価」「Q-U検査による評価」「本人や保護者へのアンケートや聞き取りによる評価」「学力検査」などで行う。
- ウ 校内体制や運営上の問題について、校内の教員、関係者などによるアンケート調査を行い分析する。

4 研究の経過等

(1) 教育課程の内容

教育課程の特例を適用し、試行期間では定時制に通う多様な特徴を持つ本校の生徒から対象生徒を絞り込みながら、生徒の学習上又は生活上の困難を多面的に理解し、将来、自信を持って社会で生活していけるよう、柔軟で弾力的に運用をしていく。

(2) 全課程の修了認定の要件

基本的には、「自立活動」は教科科目ではなく領域のため、授業に参加して少しでも人と関わろうとする意欲が見られ、前向きに自立しようとする態度を示すような成長が見られた場合には、単位を認定することを保証する。

(3) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	<p><研究基盤の確立と第1次研究></p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究計画の策定（校内研究推進委員会，運営指導委員会） ・生徒のソーシャルスキルにかかわる実態把握と対象生徒の絞り込み ・SSTルームにおける自立活動の指導内容の検討（1年次生から実施） ・発達障害のある生徒に対する授業やテストにおける工夫 ・対象生徒の個別の支援計画の作成 ・運営指導委員会及び専門家を招聘した職員研修による理論的理解の推進 ・先行研究，実践及び文献での研修，先進校への視察 ・第1年次研究のまとめと次年度計画策定
第2年次	<p><実践研究の見直しと第2次実践研究></p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究計画の確認（校内研究委員会，運営指導委員会） ・SSTルームにおける自立活動の指導内容の検討（1，2年次生） ・SSTルームの効果的な運営と校内体制の検討 ・各教科における指導方法の工夫と配慮事項の検討 ・1年次から継続の生徒の変容，効果の検証
第3年次	<p><研究のまとめと研究成果の公表></p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究計画の確認（校内研究委員会，運営指導委員会） ・全学年による自立活動の指導の実施 ・本研究に沿ったSSTルームの教育課程の改善実施（授業研究を含む） ・運営指導委員会による研究内容及び研究推進について評価・改善

(4) 評価に関する取組

	評価方法等
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ・対象生徒の学習成果物による評価（年2回） ・行動観察記録等による分析的評価（年2回） ・標準化された評価シートによる分析評価 ・教職員の内部評価 ・生徒からの聴取による自己評価，保護者へのアンケート調査
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ・対象生徒の学習成果物による評価（年2回） ・行動観察記録等による分析的評価（年2回） ・標準化された評価シートによる分析評価 ・教職員の内部評価 ・生徒からの聴取による自己評価，保護者へのアンケート調査
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> ・対象生徒の学習成果物による評価（年2回） ・行動観察記録等による分析的評価（年2回） ・標準化された評価シートによる分析評価 ・教職員の内部評価

	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒からの聴取による自己評価, 保護者へのアンケート調査 ・3年間を通じた研究仮説の検証 ・実践報告書の作成と報告会の開催
--	--

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

今年度は、自立活動の授業を教育課程の特例として取り入れ、普通高校における自立活動の授業を通級指導の形式で行うという取り組みを中心に事業を進めた。

本校には、障害等により困難を抱える生徒が多数在籍しているが、本事業の実施によって、こういった生徒たちが中学校までと同様の支援を継続して受けながら、高等学校においても安心して過ごせる環境を用意することができるようになった。高校入学後に途切れていた支援が再び始まったことで、半期の間にも目に見える形で生徒に変化が見られ、その効果が顕著である。不登校になっていた生徒も通級指導を受けられることは気持ちを発散させ良い気分転換となり登校日を増やす機会となった。

通級指導教室で自立活動の授業を受けることで単位の修得が可能になったことは、卒業に向けて学業を進めていくうえで受講生徒の大きな励みになっている。

全校生徒への取り組みとしては、一斉授業の工夫改善をめざして UDL を取り入れた授業を意識して行った。従来から授業における UDL の情報の共有を行ってきたが、職員研修会を開催し改めて教員が UDL について学ぶ機会を設けたことで教員の意識の向上という面では効果があった。

また、特別支援教育についての教職員研修会を校内において3回開催し、教員の知識の向上と意識改革の点で大きな成果を上げた。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

自立活動については、来年度以降、より柔軟により良い形で通級指導教室が運営されていけば、本校に在籍する特別な配慮を必要とする生徒への支援は充実し大変有意義なものとなる。

支援を必要とする生徒に適切な支援を与えるためには、本校の単位制という特徴を活かして新年度に生徒一人ひとりが作る時間割の中に生徒の希望に沿う形で自立活動の時間を組み合わせることができれば、より参加しやすくなる。単位制だからこそできる利点であり、柔軟な考えのもとに計画を立てたい。

経験者や専門知識のある人材を確保する必要性も強く感じられた。高等学校の教員の特別支援教育への知識不足は研修を積み重ねることによって補い、外部の専門機関と定期的な連携をとっていきたい。

次年度は、夜間部でも通級指導を行えるよう、経験のある講師の確保や、生徒の情報を集約し対象生徒を決定することが課題である。

授業時間の設定、授業の内容、評価方法等、次年度に向けて課題が残るが、より柔軟な運用による研究の実践ができるよう検討していきたい。